

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4370800502		
法人名	社会福祉法人 愛隣園		
事業所名	愛隣の家グループホーム		
所在地	熊本県山鹿市津留2025-1		
自己評価作成日	平成28年12月20日	評価結果市町村受理日	平成29年3月16日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php">http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなろ福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	平成29年1月20日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

県北の自然豊かな地に位置し、関連施設が多数隣接し、近くに公園もある環境と木造で温もりある建物を大切に、本人らしく、入居者と家族との関わりを大切にできる生活を目指しています。全職員が笑顔で明るくサービスの質の向上を目指し、研修会など参加、また、関連施設との連携から安全や介護技術の向上が図られている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

福祉機能が集中する法人の一角にあるホームでは、法人行事の参加等人的交流や緊急時体制、研修体制が確立した中で、今年度は震災という状況に、ホームでは何事もなかったことや、被災したホームから4名を受け入れ震災に関われたことに感謝の念を持つとともに、職員のケア力やチーム力を発揮している。開設当初からの理念である“ゆっくり 笑顔で あるがまま 楽しく みんなと つながろう”の実践に向け全員が一致協力し、97歳を筆頭に高齢化や重度化傾向にある中に役に立つことを喜びとして出来る力を見出したり、入居者と職員が労わりあいながらの生活ぶりを垣間見ることのできるホームである。地域の資源を活用した外出等穏やかな日常にメリハリを持たせ、充実した運営推進会議や家族の協力を得ながら、地域の中に確固たる基盤を確立させており、今後も地域福祉へ寄与されるものと大いに期待されるホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

### 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「ゆっくり笑顔であるがまま 楽しくみんなとつながろう」を職員でつくり、玄関・台所・職員トイレ等に掲示、朝礼や話し合いにて共有、この理念を元に全職員が常に意識し行動、実践につなげている	開設時からの理念を継続し、朝礼時に入居者の日々の違い等気づきや疑問を出し合いながら話し合っている。全職員が行動・ケアの原点を理念にあるとして捉え、“個”を大事に受け止め、認知症状の進行も見られる中で、入居者のあるがままを受容している。職員の自然体での寄り添う姿勢等に、自分たちで作り上げたという理念が浸透していることが表れている。また、運営推進会議を通じ啓発が行き届き、地域生活が充実したホームである。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の三岳文化祭に作品掲示、リサイクル回収に協力、どんどやなど参加。法人夏祭りや秋の大祭の馬追いなどの慰問の時に地域や家族に案内。地域料理教室に参加。又、地域の中学校の文化祭に招待されている。	地域の多様な社会資源と密着したホームであり、公民館活動のなかでの地域高齢者とのふれあい(料理教室等)や、保育園児や中学生との相互交流等継続して取り組んでいる。地域の文化祭には作品を出展し出かけた、小学校のリサイクルへの協力や法人での夏祭り等に出かけ交流する等入居者が地域とつながりながら生活できるよう支援している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	「介護なんでも相談所」を設置、誰でも気軽に相談できるように、看板を立てている。又、徘徊者捜索声かけ模擬訓練や地域の料理教室に入居者と職員が参加し、認知症の人の理解について地域の人々に貢献できる場所となっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	事例報告や地域行事などでの様子を報告し、認知症について意見交換のなかで、認知症への理解を深めサービス向上につなげている。地域の方より祭り等へのお誘いを受ける。	2ヶ月毎に開催する運営推進会議は、老人クラブや区長会長・公民館・行政・地域包括・認知症サポートリーダー、入居者代表や同法人等地域の中で暮らし続ける入居者に関わる多様な関係が一堂に会して開催している。事例報告のもとにした意見交換や質疑応答など双方向の活発な会議となっている。公民館活動への参加報告がスムーズな車いす利用へと繋がる等地域も好意的に関わられていることが表れている。	毎回の質問の多さは、この会議の特徴であり、透明性のある運営体制であることが確認された。議事録の中に質問者を明示いただき、出された意見や質問に対する進捗状況を次回に説明されることを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議に地域包括支援センター職員の毎回の参加により相談しやすく、連携の強化につながった。また、市主催の研修会も多く、相談しやすい。	運営推進会議への行政からの毎回の参加や、市主催の研修会参加等により、担当者との関係が築かれており、迷ったときには電話で相談できる関係にある。また、「介護なんでも相談所」の受託や、地域密着型サービス事業所運営委員として長年に亘り関わる等相互協力の関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	隣接施設との合同の身体拘束廃止委員会に参加することにより、理解や意識を高め、全職員への回覧や報告。又、全職員で身体拘束をしないケアに取り組んでおり、意見を交換できる体制が取れている	法人内での研修や身体拘束廃止委員会により事例を検討(3ヵ月毎)している。ホーム内でも報道によりその都度話し合いや、毎年の研修により職員の考え方を再認識させている。また、管理者は無意識に出てしまう言葉使いに対して、本人や家族の立場に置き換えて考えるよう指導している。入居者個々の外出傾向を把握し、時には一緒に出掛けたり、転倒予防(ふらつきの為)として家族に説明しセンサーマットを使用する場合もある。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	全職員が虐待防止に関心を持ち、事件の報道を話題にあげ、意見を出し合い防止に努めている。又、定期の身体拘束委員会に参加し、全職員に回覧・報告。毎月の全体会議では、身体拘束について学ぶ機会が設けてある。他職員の研修報告から学ぶ機会もある		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者は家族より相談受け、助言や協力などの支援している。職員は学ぶ機会があり、情報の共有もできている。(成年後見制度利用は現在1人活用)		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	十分な説明を行い、不安や疑問を必ず尋ね、理解・納得を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者の言葉や態度から、要望を聞き、察する努力や言いやすい働きかけにて、運営に活かしている。毎月家族との話し合いの機会を設けている。家族会にても意見を出せる機会もあり、運営に反映できるようにしているが、もっと気軽に意見が出しやすい家族会を検討している。	毎月の利用料を持参払いとして、現状報告や「なんでもお話しください」と職員からの声かけを徹底しているが、あまり申し出は無い様子であり、家族会の中でアンケートを行い、気軽に言いやすい環境としている。ホーム便りを通じ、状況を発信されており、更には行事のみならず日常生活も便りの中で発信されると家族との情報共有として生かされると思われる。	家族会の中で、家族のみでの話し合いの場を設け、代表を通じて意見や要望を収集してもらうような体制への変更を検討いただき、今後も忌憚の無い意見や要望を更にホーム運営に生かされることを期待したい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者は、職員に対し、毎日のミーティングで、意見や気づきを言えるように働きかけ、すぐに反映させている。運営者は、全体の職員会議や日頃の報告・相談にて、職員の意見を反映している	管理者は、日々ミーティングの中で職員の意見や提案等を聞き取りし、随時対応し、難題については法人に上申することとしている。また、代表及び副施設長もホームに足を運び、入居者の状態や職員とのコミュニケーションを図っている。産休や育児休暇等の福利厚生の整備や、家庭の諸事情により勤務ローテーション等働きやす環境が作られている。また職員の負担軽減に法人のバックアップも有る。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	柔軟な対応ができるよう、必要な時間帯に職員を確保するための話し合いや勤務の調整に努め、変更や工夫をすぐに行っている。職員がやる気の出せる職場環境や整備に常に努めている		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	山鹿・菊池地域での研修会・隣接の特養での合同研修会、県や他事業所の研修会等、多くの職員が受講できる配慮。研修後は報告書提出し、全職員が必ず閲覧及び話し合いができています。事故予防、衛生管理、身体拘束委員会参加及び報告が出来ています。普通救命講習修了書を全職員が取得済		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	山鹿・菊池地域のネットワークづくりや勉強会や相互に相談・アドバイスできる機会がある。隣接の看護師・介護職員・管理栄養士との交流もあり、質の向上につながっている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	不安や要望を言いやすい働きかけや本人と向き合う姿勢を常に持ち、配慮や努力をしている。センター方式も活用している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービスを導入する段階で、家族等が困っていることや不安・要望等に耳を傾けながら、相談しやすい声かけや雰囲気作りを行い、家族との信頼関係作りに努力している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人や家族との話し合いの中から、その時、本当に必要としている支援を共に考え、介護計画や環境作りを行なっている。入所前の段階から、管理者と担当介護者で訪問して必要な支援を見極めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	生活全般、本人の経験や知恵を言いやすい働きかけから、職員と共に暮して楽しむ場面を作り、共に暮らす関係を築けている。また、本人の人生を理解した上で、生活の中で本人が選択できる場面を作り、共に生活を考えるように全職員が接している。(情報の共有もできている)		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族と共に本人を支え合う関係をつくり、家族会(年2回開催)での家族同士の交流により、家族の絆の大切さが再認識できるように働きかけている。夏祭りや外出・外食・買物・通院には、家族の協力もあり共に支え合っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの場所への散歩や友人への隣接の施設におられる馴染みの人とおしゃべりがしやすい支援。地域の行事参加時には、必ず声かけてくださる方がおられ、馴染みの関係ができています。声かけてくださる方が毎年増えてきています。	特養やデイサービス利用の知人に会いに出かける方や、地域の友人に声かけし訪問を依頼したり、家族との外食、同窓会に集まった教え子の方々が大量で訪問される等これまでの関係性が継続されている。また法事や正月に我が家へ帰る方、毎月の法話会(お寺の檀家)に出向いたり、神社祭り、中学校の文化祭見学、どんどや等で出かけることで地域住民との交流や関係を継続させている。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者の相性・要望を考え、食堂や居間で席を配慮。役割分担により利用者同士が支え合っている事を実感されている。又、孤立することが無いように職員が橋渡しになり、より良い関係づくりを支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めて	他施設等に入所された方に会いに行き、関係を断ち切らないようにしている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	センター方式の活用により、家族から本人の人生の情報を把握し、本人の希望を聞き取りながら、本人本位の生活を検討している。又、要望の訴えない方には、顔の表情や行動、態度、家族からの情報をもとに本人の想いを検討している	入居前の生活等家族から聞き取りしている他、本人の思い出話の中から生活歴を引き出している。長い入居歴により、発語が難しくなったり、言葉での返事が困難な状況もある中で、表情・言動で推察したり、笑顔をバロメーターとして捉え、個別ケア記録により共有化として、プランニングに反映させている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所前の施設や家族からの情報だけでなく、入所後も家族や本人との会話・面会者(友人等)から生活歴を収集している。センター方式を活用し、家族にも記入してもらうなどにも努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	生活歴や本人の想いを踏まえ、個別の1日の過ごし方を把握している。又、少しの変化でも適宜記入・共有・ミニカンファレンスの開催にて検討し、全職員で連携をとり、把握している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	担当制にて、「私はこうしてもらったら嬉しい」、「人生マップ」などのシート活用、家族の訪問時に意見や要望を聞き、全職員で検討し、介護計画を作成している。主治医の意見や職員のアイデアを反映している。	地域の中で暮らすことや健康維持に向け、“笑顔で安心して暮らせる”こと等を目標としたライフサポートプランを作成。半年ごとのモニタリングやプラン見直しの時期に家族に意向等を再度聞き取りし、案を提示、更に話し合いの場を持ち、正式なプランを作成しており、家族の思いと、職員の気づき(担当職員が責任を持ってミーティング時に話し合いを行っている)が反映された個別的なプランである。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	本人の変化や状態がわりやすいように個別に記録し、情報を共有したり、気づきをすぐに記載し検討、実践や介護計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	愛隣園法人事業の多機能を活かした柔軟な支援や協力体制がある。慰問や法人夏祭りなどは、地域の方の楽しみにもなり交流の場である。昔ながらの行事(大祓い、紀元節式典、花まつり、法話会など)や音楽療法、敬老の日には、お祝いの手作りお菓子や劇へのお誘いあり、喜ばれている。ミカン狩りやきんかんちぎりの機会もある。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	多数の施設が近隣にある関係で、保育園・踊り等の慰問や各行事は、ホームに必ず声かけの働きかけがあり、外出の支援ができています。また、運営推進会議にても働きかけをしている。ボランティアの活用にて交流を楽しまれている		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるよう支援している	本人や家族の希望を聞き、かかりつけ医の受診を家族とホームとで協力して、受診介助、情報提供を行い、医師との連携にて、適切な医療を受けられるように体制を整えている。家族への連絡・報告も行っている。	ももとのかかりつけ医を支援し、入居時などに相談があれば訪問診療のある医療機関やホーム近隣の医療機関を紹介している。受診は必要な情報を医師へ提供し、ホームや外出を兼ねて家族での対応もあり結果を共有している。職員は日頃からバイタルチェックや表情を観察し、些細な変化も見逃さず昼間のうちに受診等の対応を行っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医師との連携のうえで、日常の健康管理や状態変化に応じた支援や適切な医療活用により、利用者の支援ができています。隣接の特養看護師に気軽に相談でき、適切な受診につなげている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は職員のお見舞いと病院の看護師より情報提供受け、経過記録記入。又、ダメージ防止のため居室にある馴染みの物を持っていったり、早期退院できるように病院関係者に働きかけをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化に向けて話し合う機会を作っている。重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人や家族等、かかりつけ医とも話し合っている。全職員、方針の共有ができ、チームで取り組む体制が出来ている。重度化への対応は、その都度に全職員で検討し、見直している。(入浴、食事、排泄、外出、他)	入居時に重度化・終末期対応や入居による環境変化でのリスクを説明している。2名介助での入浴が困難になったり、継続した医療が必要な場合は医師を含め家族と相談している。家族の意向を大切に支援しており、「寝たままでも入浴させたい」との要望から入浴設備の整った特養への移行も行われている。職員は重度化・終末期支援の方針を共有し、個々の重度化に応じた支援方法を見直し、これまで母体施設看護師による研修も行われている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変や事故発生時に備え、全職員がマニュアルを把握しており、隣接の特養の勉強会にも随時参加している。又、救急救命の実技・講習参加もできている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	関連施設が多く、緊急時の協力体制あり。消防署来所にての火災訓練や緊急用ボタンで隣接施設からの協力体制及び訓練もできており、夜間想定訓練も行っている。毎晩、隣接施設職員の声かけ、見回りをしてもらっている。運営推進会議にも話し合っている。	関連施設の協力を得ながら、年2回避難訓練を行い、内1回は消防署の参加協力のもと実施している。熊本地震では法人には大きな被害はなく、県内の介護施設から避難者を受け入れるなど出来る貢献に努めており、運営推進会議でも自然災害について報告や意見交換がされている。備蓄は水や食料(カレー・缶詰など)、排泄用品を確保し、震災後は物品の落下がないか、タンスの位置確認などを行っている。	ホームでは日頃の安全管理として、隣接施設職員による見回りや週1回のシーツ交換時に居室のコンセント確認を行っている。近隣・地域住民との協力による訓練の実施や、消火散水栓を使った訓練が予定されており、今後もホームのみならず、地域も巻き込みながらの訓練の継続に期待したい。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	本人の自尊心を傷つけないように常に考え、声かけやケアを行っている。申し送り時は、名前だけでなく居室の番地を活用して配慮。玄関の面会簿や居室の名札は、事前に家族の了承を得ている。	入居者の個性に視点を置き、様々な問題などが発生しても個性と受け止め、認知症の進行に合わせ支援している。管理者は支援方法に悩んだ時は、先ず本人に聞いてみることを指導している。呼称は苗字や下の名など本人の意向で対応している。入居者の中には作業(洗濯物たたみ・食材の下ごしらえなど)を頼まれることを誇りとされている方もあり、安心してお手伝いができる環境を作っている。職員の守秘義務については、研修会などで指導が行われている。	玄関に置かれた面会簿については、個人情報の点から個別記入などの検討が必要と思われる。



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	選択肢を作り本人が選択しやすい場面作りや、日常生活の中で希望、関心、嗜好を言える働きかけをゆっくりとした声かけで行っている。本人の選択後や自分で言えない方に対しても反応や表情などで納得されているかを確認している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	本人のペース優先で、柔軟な対応を心がけている。地域や関連施設での行事等も強制することなく本人の選択に任せている。また、本人の希望を確認し、【その時に何を優先すべきか】を必ず頭の中に入れ実行。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人の希望に合わせて、地域の美容室や移動美容室を利用。服装は、職員と共に選ぶ機会を作り、若々しい服装や明るい服装を選ばれるようになった方もおられる。外出や行事に合わせた服装選びの声かけや支援。入浴後の化粧水の介助など細やかに配慮。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の楽しみを重視、嗜好把握し、喜びある食事に努めている。特に食欲ありすぎの方(糖尿病等)への調理や盛り付けの工夫や好き嫌いの多い方への対応が来ている。能力に応じ、調理や盛り付け、後片付けなどできる場面作りを積極的に支援している。祝日の献立には変化をつけ、楽しんでもらっている。	栄養士の資格を有した職員を中心に献立を作成し、食材の殆どは安心・安全を重視した業者からの配達や近隣のスーパーを利用している。入居者の嚥下状態からご飯は軟らかめに炊いており、食形態も個々に応じ準備している。刺身や、入居者の好物の餅が楽しめるようつくたて餅を味わった後も、雑煮・ぜんざい・きな粉餅、薄切りにして汁物へ入れるなど職員が工夫して提供している。	職員はその日のメニューと同じような物を持参した後、ホームの器に移し食事するなど、入居者に配慮した取り組みである。今後、味や量の確認を兼ねて、職員が1名でも同じ物を食べることを検討いただきたい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養士が中心となり、本人の希望を取り入れたバランスのとれた献立、確実な水分補給の支援。病気でも家庭的で満足できる工夫。本人の習慣を大切に、食事摂取量のチェックも行う。個人の嗜好を重視し、好き嫌いの多い方や飲み込みが上手に出来なくなった方のために、常時代替を用意している		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアの能力に応じた支援を行っている。また、入れ歯洗浄(薬)も行っている。本人お気に入りの歯磨き粉も把握し、対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表の使用によりパターン把握し尿漏れやおむつの使用量を減らしている。時間ごとにさりげなくトイレへ声かけ・誘導。陰部洗浄や清拭も随時行っている。本人に合った排泄について話し合っている。	ホームではできるだけおむつを使用せず、個々のパターンにより失敗やおむつの使用量を減らすよう支援しており、リハビリパンツから布パンツへ移行された方もおられる。夜間はポータブルトイレを使用される方や、安眠を重視しパット交換が行われているが、尿量や回数等により排泄用品の検討を重ね使用している。ポータブルトイレも使用しない日中に洗浄や日光干しにより清潔に管理している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	個人に合わせたヨーグルトや野菜・繊維の多い食品を使った食事作りの工夫で便秘予防 又、水分補給と運動や散歩の働きかけの支援にて、自然排便を増やしている。主治医への相談も行なっている。テレビの体操(録画)を見て自主的に体操される場面作りもできている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	回数や順番は、本人の希望に合わせている。しょうぶ湯やゆず湯など季節を味わい楽しめる支援。入浴拒否の方への時間をかけた誘導や支援も行なっている。足浴も実施。重度化に伴い職員2人介助で安心して入浴できる支援もできている。	入浴は本人の希望や気の合う方と同じ曜日、通院日に合わせるなど足浴も併用しながら週3回支援している。拒否の方には時間をかけ誘導したり、身体機能に応じ2名での介助など安全面に配慮している。浴室内の壁は檜、浴槽はヒバ材の使用で和の雰囲気にも包まれており、菖蒲湯や特に柚子湯においては1週間実施するなどゆとりを持って行われている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人に合わせた就寝・起床。温湿度に注意し、加湿器や個人に合わせたエアコン・あんか・氷枕の使用。自由に各居間のイスやソファに休息、また重度化に伴い居間(和室)にはベッド置き、休息をしてもらっている方もおられる。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人別処方箋ファイルが、常時すぐに見れる場所にあり、全職員は薬の目的や副作用、用法や用量について理解。変更時は確実な申し送りの工夫と実践。症状変化時は、主治医に相談や報告。服薬は、個人能力に応じ介助し、確実な服薬のために声かけと工夫を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	個人の生活歴や力を把握し、これを活かした役割(調理、食器洗い、洗濯干し・たみ、台拭きなど)や楽しみ(踊りや歌など)にて張り合いのある生活につながる支援をしている。季節感を大切にしたり楽しみや本人が1人で出来る役割の工夫を考慮して支援。個別の嗜好品がいつでも食べれる支援もしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけるように支援している	希望に合わせた外出や季節を感じる外出・関連施設での慰問等の外出支援。家族の協力にて外食や外出、近くのみかん山、地域の行事等にて喜ばれている。近所の花を摘み、生け花を楽しむ支援や近くの公園への散歩も出来ている。今年は、入居者全員での外食の機会をとれず、残念である。入居者が喜ばれるので、計画中である。	法人敷地内は樹木や草花の開花など季節を感じる事ができ、希望や落ち着かれない表情になられた方などに声をかけ散歩に出かけている。また、併設施設でのボランティアとの交流や喫茶ルーム利用なども行われている。地域の理解や協力関係が構築しており、公民館で開催される料理教室に出かけ住民と交流している。また、プラン作成の中で家族との外出も促しており、外食や初詣などの協力が得られている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	全職員、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、本人の管理能力に応じ、個人の希望、及び、家族との話し合いにより、自己管理や外出時のみ等の支援をしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	自由に電話をかけることができ、電話がかかってくることもある。電話は2台設置により、使いやすい場所を利用してもらっている。家族からのお便りも頻回にある。目が見えにくい方には代読。家族への電話の声かけ・支援。誕生日には遠方の家族から電話があり喜ばれている		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節感を感じてもらうために、入居者と家族が共に、季節に応じたホーム内の飾りつけをしたり、季節の花や果物を飾っている。必要に応じ、寒冷遮やすだれ・よしず・カーテンを使用したり、テレビやラジオの音量にも常に配慮している。個人に合ったイスや目印の使用。	ホーム内は入居者が料理の音や匂いを身近に感じながら過ごす事ができる環境である。畳敷きの居間は、車椅子でも気軽に庭先に出れるよう、畳の材質や段差への配慮など経年と共に入居者の身体機能に応じた改善されている。配達された食材は季節を感じてもらえるよう、まずは入居者に見てもらったり、散歩中に摘んだ草花も異食に配慮しながら見守りのもと飾るようにしている。	浴室に繋がる廊下には、文化祭などに出品した作品が掲示されており、入居者自身もそこを通る時眺めながら歩かれるようである。今後も自身の作品が励みや楽しみとなるような作品の掲示に期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食堂・2つの居間にて、ソファ・数種類のイスが随所に置いてあり、自由に選んで過せる場所に配慮。また、入居者同士の相性も考慮。毎日、洗濯物を干した後に井戸端会議を楽しまれている方もおられる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族の協力あり、使い慣れた家具、仏壇、イス、毛布類、ラジオ、テレビ等や家族写真を自宅より持参。自分で書いた習字紙を居室に張られる方もおられる。	入居に当たり、一覧表により必要な物品を説明し、使い慣れたものの必要性を伝えている。併設施設からの入居時は、以前と同じ畳の間を用意し不安なくスタートできるよう配慮している。居室には洗面台が設けてあるが、立位的に見守りが必要な方は共有スペースで洗面されている。居室内の持ち込みや量は様々であるが、時間が気になる方には入り口にも掛け時計を配置するなど、一人ひとりが安心して過ごせるよう工夫している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室は番地と名札を掲げ、本人のわかる目印で混乱を防いでいる。基本バリアフリーで安全に配慮した作りの中、個人の能力をみて、できるだけ自立した生活がおくれるように手すりを増やしたり、個人に合わせた工夫をしている。		